

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

1. 令和6年度後期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和6年度後期に開講された科目について、各学部・学科ごとに学生による授業評価の結果をまとめた。例年、実習・実験、ゼミ、集中講義などは分析の対象外としており、同一科目のクラス別開講の場合はクラス数でカウントしているため、分析の対象となったのは人間学部106科目、人間生活学部134科目であった。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する11項目（評価基準は1～5点）の計13項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計11項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 設問群①：「授業内容」 | 3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問群②：「授業方法」 | 5項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問群③：「総合評価」 | 1項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問④：「学修時間」 | 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比 |
| 設問⑤：「学修行動」 | 1項目それぞれの平均 |

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として9項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられる場合もあるが、今回は平均を利用した結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、過去の仁愛大学FD推進活動報告書を参照されたい。

1.1 人間学部

（1）共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科11科目）、および図2（コミュニケーション学科11科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は352名で、各学年それぞれ1年生＝119名、2年生＝200名、3年生＝26名、4年生＝7名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は302名で、各学年それぞれ1年＝96名、2年＝174名、3年＝23名、4年生＝9名であった。心理学科およびコミュニケーション学科の延べ人数は、昨年度よりも増加した。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3年生以上の受講数は少なかった。

心理学科では、昨年度は3年生の人数が少なかったため、1年生および2年生の分析しか行っ

ていない。従って、昨年度の1年生および2年生との比較となるが、授業内容については、1年生は低下したが2年生はほぼ同様、授業方法については、両学年とも微上昇、総合評価については、両学年とも大きく上昇した。コミュニケーション学科では、授業内容については、全学年で低下、授業方法については、1年生は低下したが2年生と3年生はほぼ同様、総合評価については、1年生は低下したが2年生と3年生は上昇した。

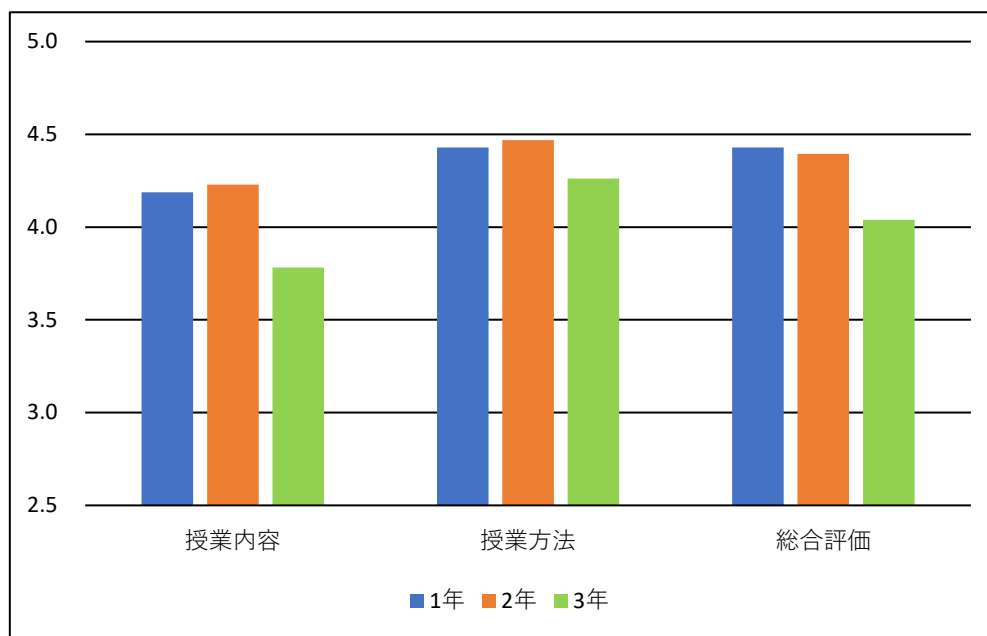


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=119名、2年=200名、3年生=26名

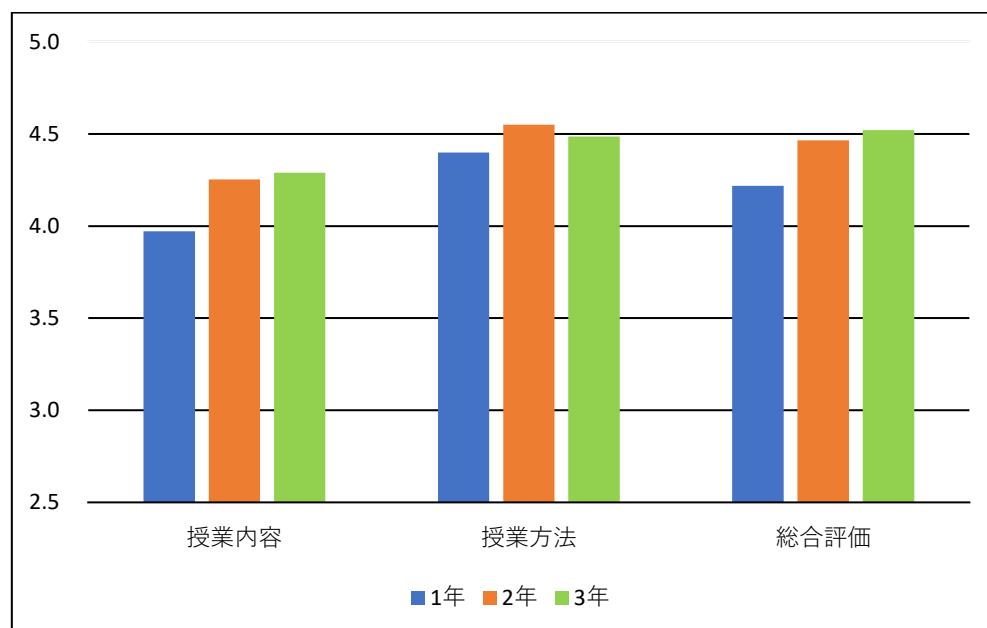


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=96名、2年=174名、3年=23名

（２）共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図３（心理学科９科目）、および図４（コミュニケーション学科９科目）にそれぞれ示した。図３に示された心理学科の学生の延べ人数は109名で、各学年それぞれ１年＝88名、２年＝12名、３年＝9名であった。また、図４に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は126名で、各学年それぞれ１年＝97名、２年＝27名、３年生＝2名であった。心理学科およびコミュニケーション学科の延べ人数は、昨年度よりも増加した。昨年度は、２年生と３年生の人数が少なかったため、両学科とも１年生の分析しか行っていない。従って、昨年度の１年生との比較となるが、両学科ともに、授業内容についてはやや低下、授業方法および総合評価についてはほぼ同様であった。

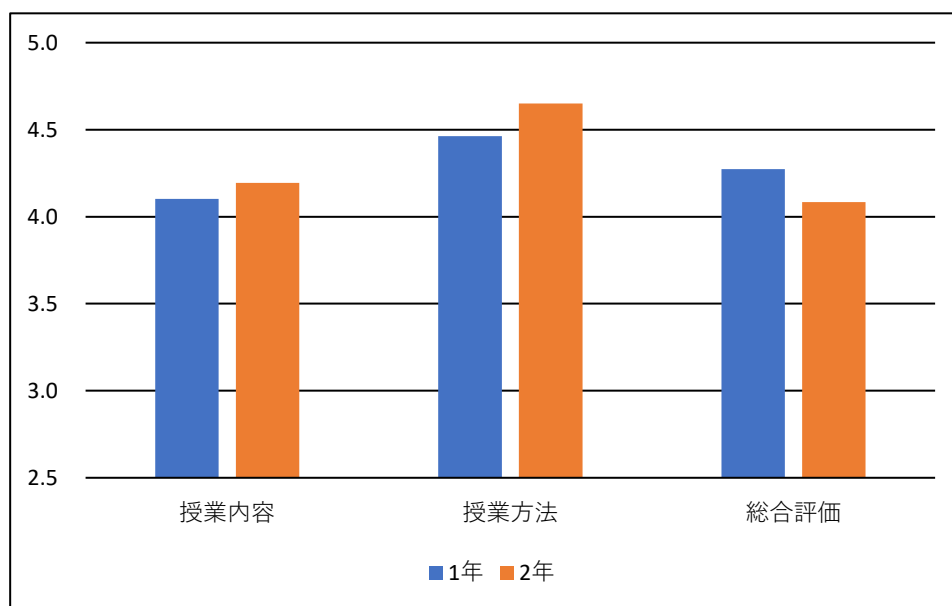


図３ 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 １年＝88名、２年＝12名

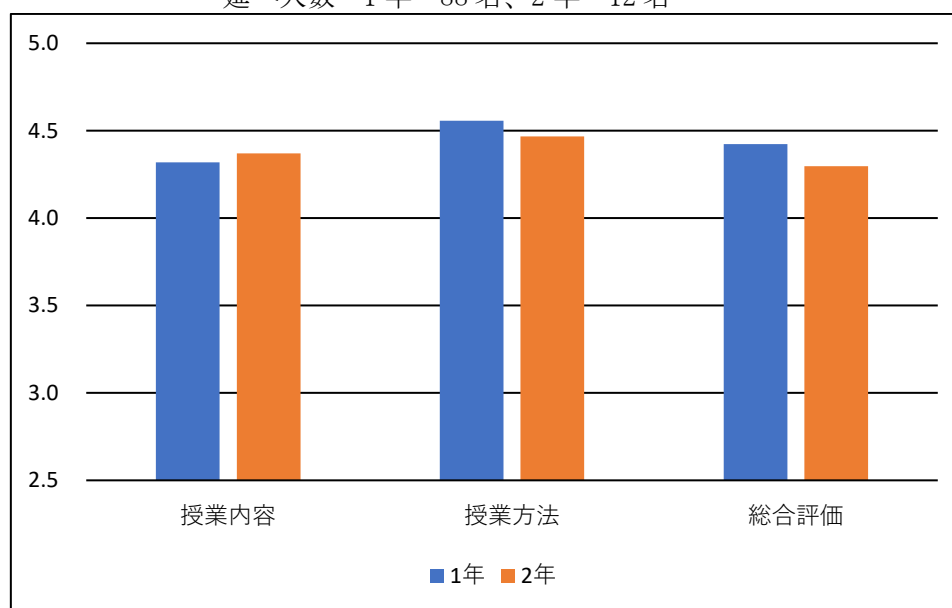


図４ コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 １年＝97名、２年＝27名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 25 科目、コミュニケーション学科 35 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,221 名で、各学年それぞれ 1 年＝291 名、2 年＝434 名、3 年＝436 名、4 年＝60 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 777 名で、各学年それぞれ 1 年＝413 名、2 年＝251 名、3 年＝84 名、4 年＝29 名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも増加したが、コミュニケーション学科は減少した。

心理学科では、昨年度は 4 年生の人数が少なかったため、1 年生、2 年生および 3 年生の分析しか行っていない。従って、4 年生を除いた比較となるが、昨年度と比較して、授業内容については、1 年生および 2 年生は低下したが 3 年生はほぼ同様、授業方法については、2 年生は低下したが 1 年生および 3 年生はほぼ同様、総合評価については、全学年とも上昇した。コミュニケーション学科では、授業内容については、2 年生、3 年生、4 年生は低下したが 1 年生はほぼ同様、授業方法については、2 年生、3 年生、4 年生は低下したが 1 年生は上昇した。総合評価については、1 年生、2 年生、3 年生については上昇したが 4 年生は低下した。

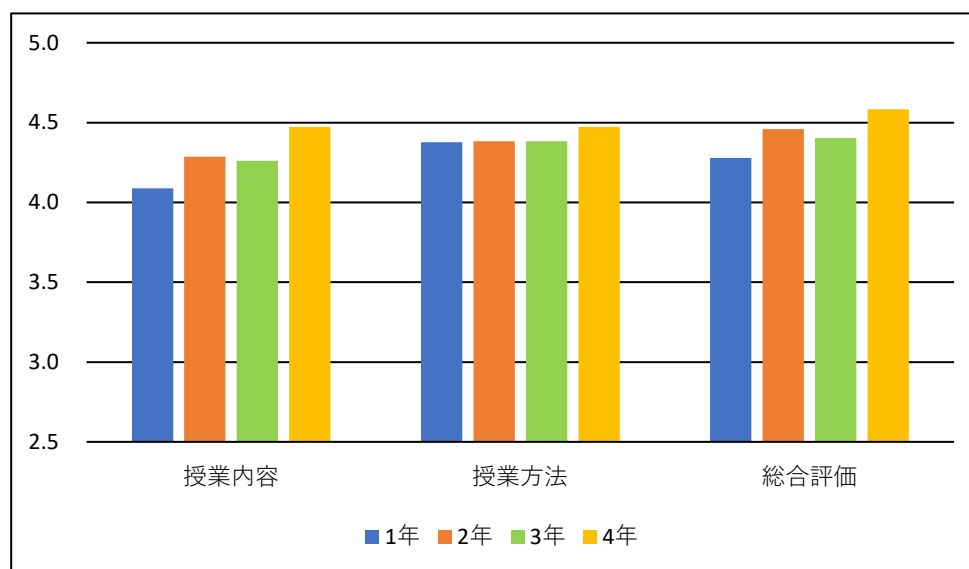


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年＝291 名、2 年＝434 名、3 年＝436 名、4 年＝60 名

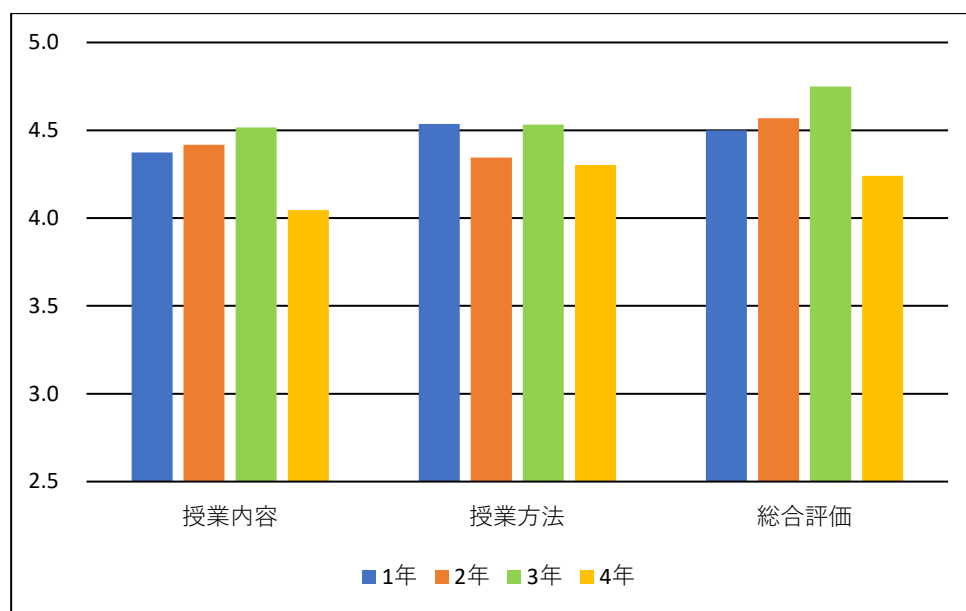


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=413名、2年=251名、3年=84名、4年=29名

(4) 学修時間と学修行動

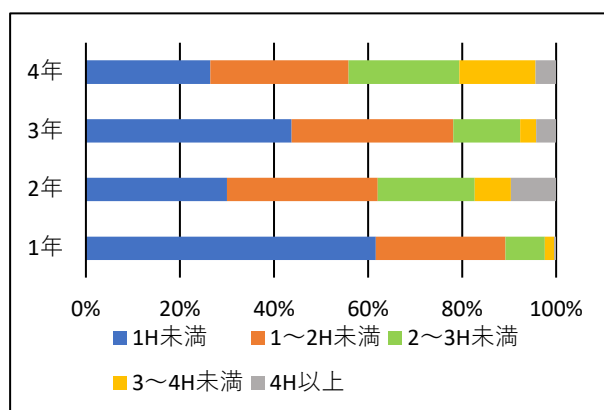


図7 心理学科の授業外での学修時間

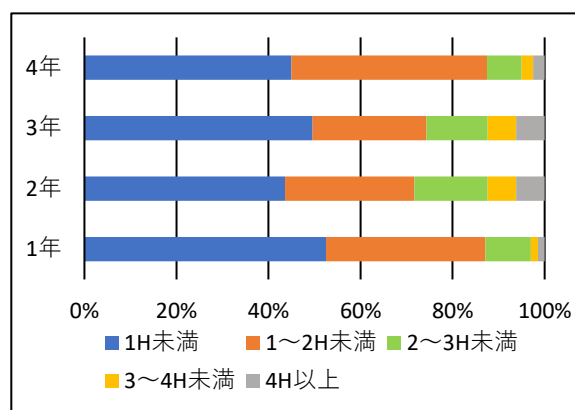


図8 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図7および図8に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、昨年度に比べ、心理学科については、1年生以外は学修時間が増加傾向にあるが、コミュニケーション学科については、全体として減少傾向にある。

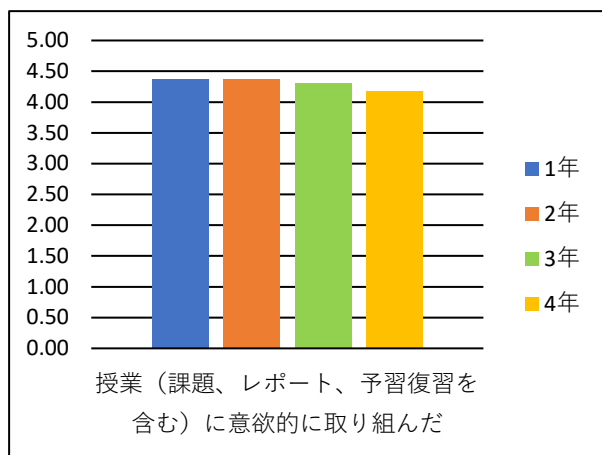


図 9 心理学科の学修行動

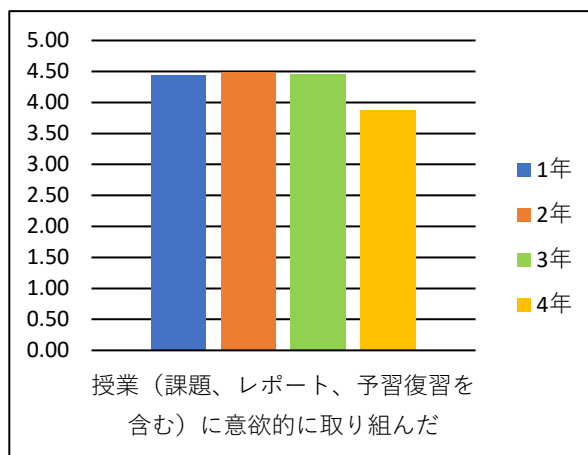


図 10 コミュニケーション学科の学修行動

続いて、各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 9 および図 10 に示した。今年度から評価項目が変更となったため、昨年度との比較は不可能であるが、両学科とも 1 年生、2 年生、3 年生は大きく変わらず、コミュニケーション学科の 4 年生の自己評価がやや低い結果となった。

（５）人間学部のもつめ

本年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。昨年度後期と同様、概ね例年通りであった。多様な学生が在籍するなかで、今後も、各教員の創意工夫による授業の質の維持・向上が求められる。より良い授業を引き続き模索していくことが大切である。

（報告：小川慶）

1.2 人間生活学部

(1) 共通教養科目

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において10科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が202名、2年生が25名、3年生が3名、4年生が0名であった。項目別評価は1年生では「授業方法」が4.40で最も高く、2年生では「総合評価」が高く4.7を超えていた。いずれの項目でも、2年生の評価が1年生の評価よりも顕著に高かった。

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において10科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が134名、2年生が43名、3年生が3名、4年生が0名であった。1年生の「授業内容」がやや低かったが、いずれの項目でも学年差が小さく、すべて4.2を超えていた。

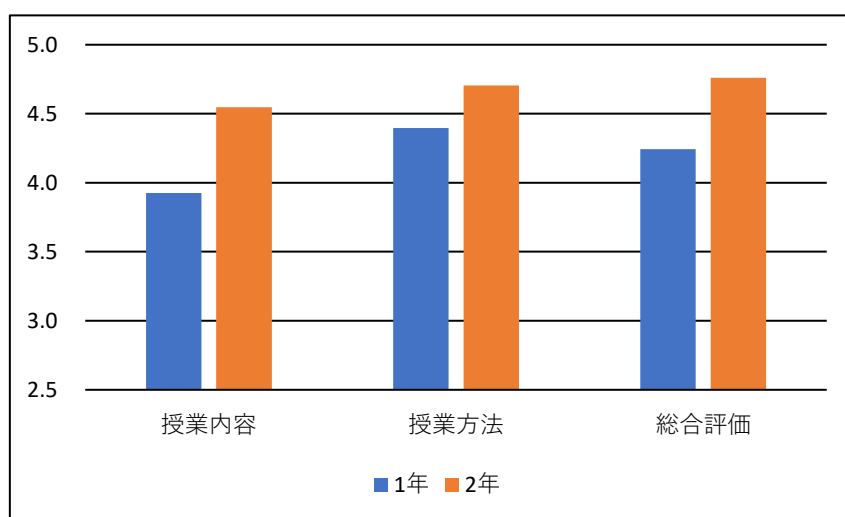


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=202名、2年=25名

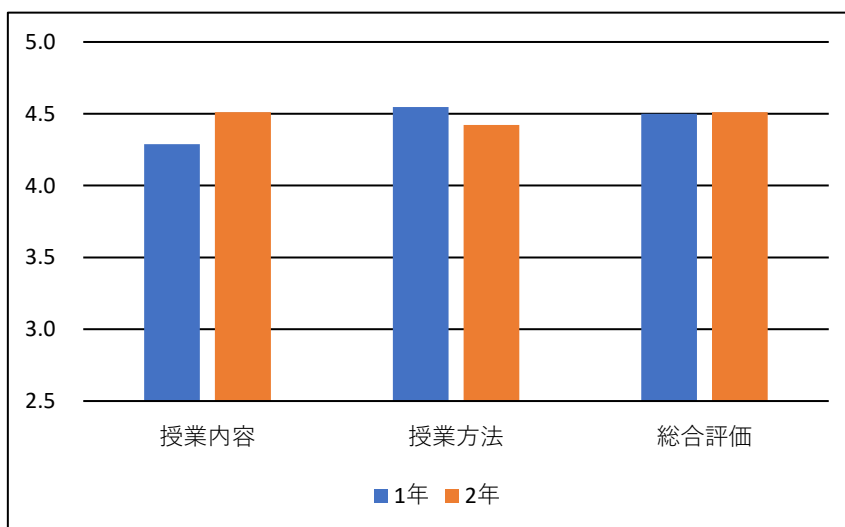


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=134名、2年=43名

（２）共通語学科目

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において 8 科目から回答を得た（図 3 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 96 名、2 年生が 9 名、3 年生が 0 名、4 年生が 1 名であった。

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において 9 科目から回答を得た（図 4 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 84 名、2 年生が 9 名、3 年生が 3 名、4 年生が 0 名であった。

両学科とも「授業方法」が最も高く、「授業内容」が最も低く、類似した傾向であった。

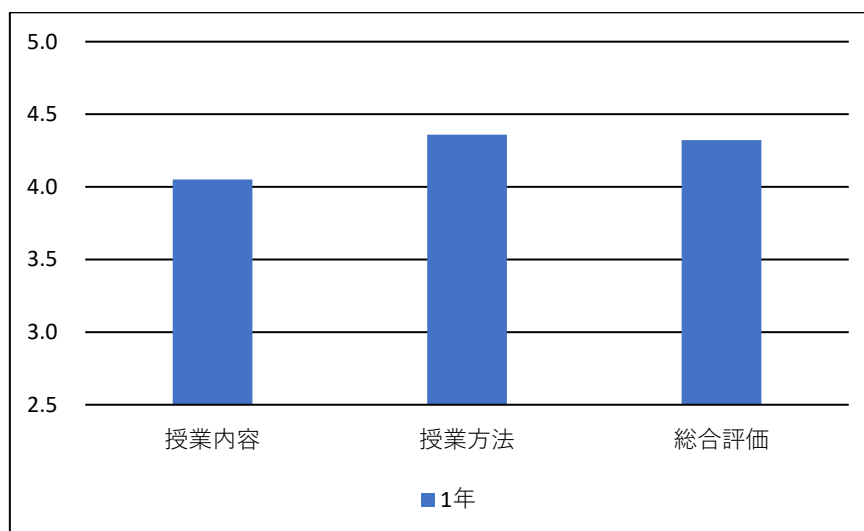


図 3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=96 名

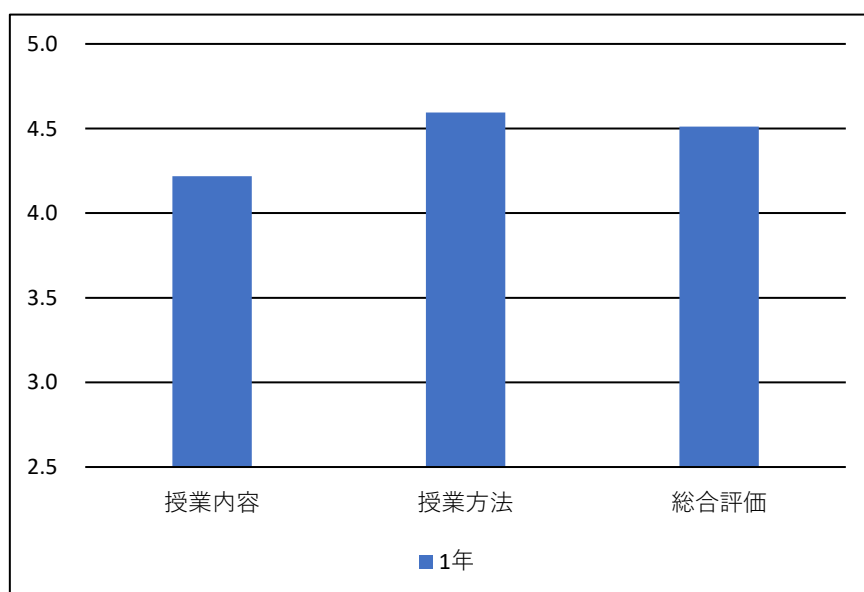


図 4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=84 名

(3) 専門科目

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 42 科目から回答を得た（図 5 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 370 名、2 年生が 401 名、3 年生が 337 名、4 年生が 25 名であった。4 年生の「総合評価」が最も低く、2 年生の「総合評価」が最も高かった。

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、51 科目から回答を得た（図 6 参照）。述べ回答人数は、1 年生が 361 名、2 年生が 291 名、3 年生が 463 名、4 年生が 8 名であった。いずれの項目も 2 年生が低く、1・3 年生は全設問の評価が 4.5 以上と高かった。

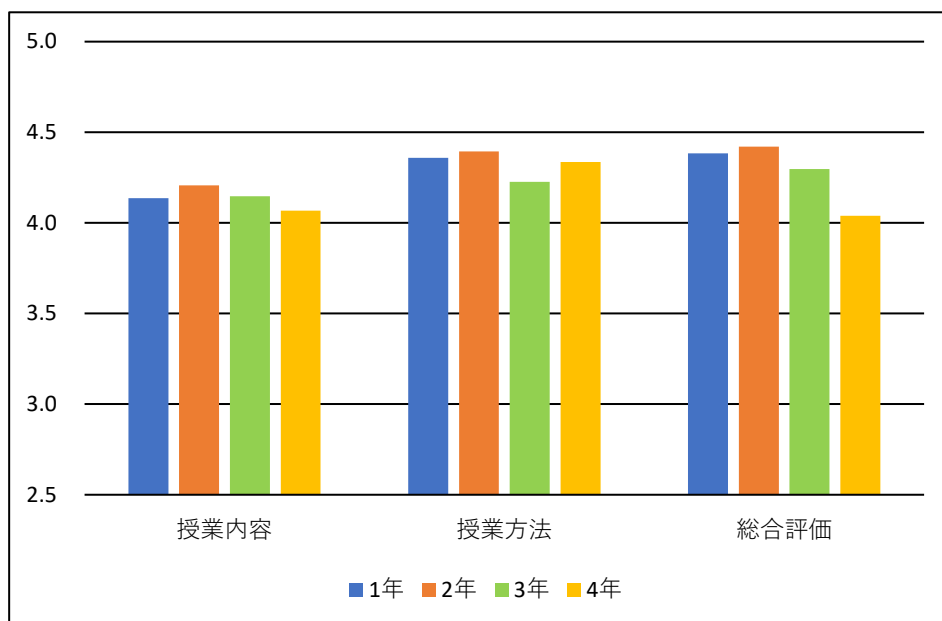


図 5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=370 名、2 年=401 名、3 年=337 名、4 年=25 名

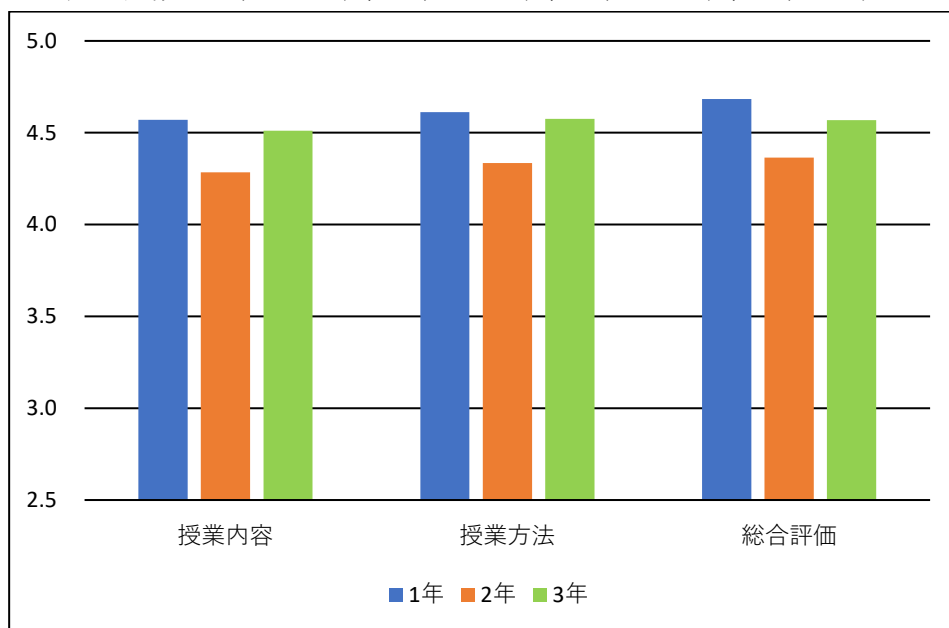


図 6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=361 名、2 年=291 名、3 年=463 名

(4) 学外での学修時間と学修行動

図7は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が668件、2年生が435件、3年生が341件、4年生が26件であった。「1時間未満」は学年が上がるると少なくなっており、4年生に向けて学修時間が増えている傾向があった。

図8は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1年生が580件、2年生が344件、3年生が471件、4年生が8件であった。1～3年生を比較すると、「1時間未満」と「1～2時間未満」で6割を超えており、類似した傾向であった。

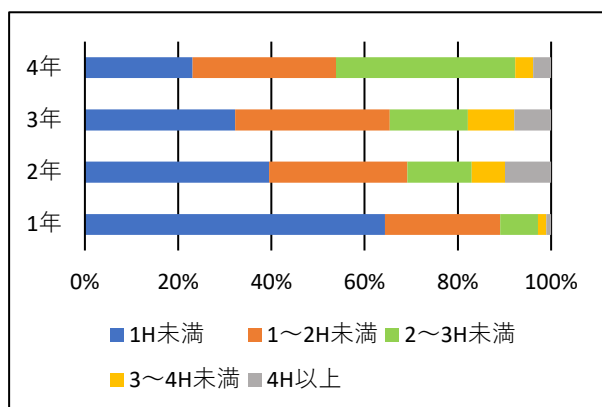


図7 健康栄養学科の授業外での学修時間

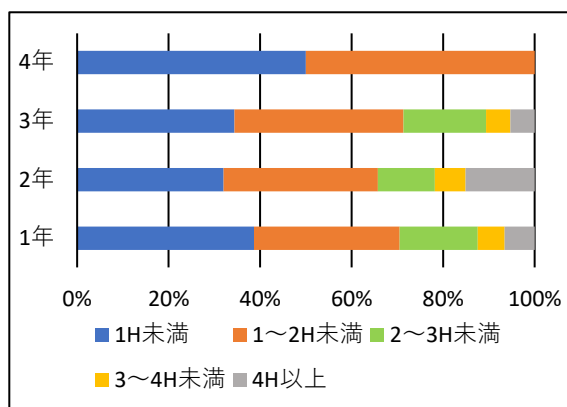


図8 子ども教育学科の授業外での学修時間

図9は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。2年生が最も高く、4.5を超えていた。図10は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。4年生を除くと、学年による違いはほぼなく、すべて4.5を超えていた。

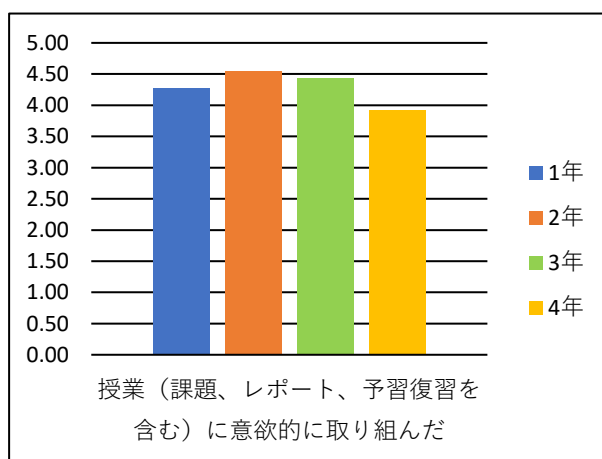


図9 健康栄養学科の学修行動

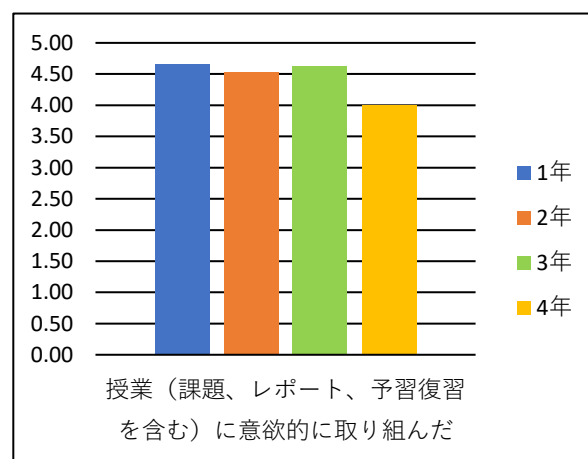


図10 子ども教育学科の学修行動

(5) 人間生活学部のとめ

本年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を概観した。評価や学修行動に関して、科目やカリキュラムの特性による影響も一定してあるだろうが、学生（個人あるいは学年・クラス全体）の特性による影響が年々大きくなっているように感じる。今後さらに学生個人の特性が多様化していく可能性を考えると、集団の中で学生の個別性を重視した指導や教育は、教員にとって非常に大きな課題である。

(報告：青井夕貴)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3. 令和6年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.1 後期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和6年度後期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された9科目についてまとめた。実施内容・方法は学部と同様であった。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および全体の平均得点に関して検討した。また、担当者が独自で個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(6) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師養成の要ともいえる演習・実習科目は重要なものであり、課題等の院生に対する負荷も大きいと考えられる。そこで、授業形態ごとの比較を行った。

図1は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は6科目、演習・実習科目数は、3科目であった。講義科目も演習・実習科目も全般的に高い評価であり、特に講義科目は前年度に比べてさらに評価が向上した。なお、例年、講義科目と比較して若干高い評価となる演習・実習科目において、授業方法の評価が少し低くなっている点に関しては、検討の余地がある。

大学院の授業は受講生数が少なく、評価の変動については原因を捉え、授業に対する理解度や成績評価との関係もふまえて、よりよい授業の展開が期待される。ただし、昨年度入学生から新カリキュラムになっていること、授業評価実施科目数が少ないことは考慮すべきところである。

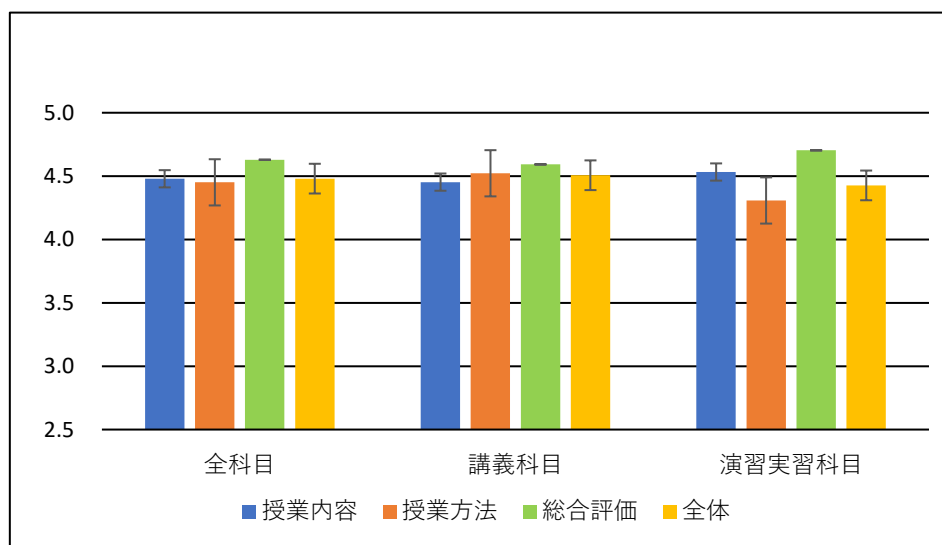


図1 各科目別の平均授業評価点 (±SD)
それぞれの科目数は9、6、3科目

(報告：大森慈子)